

令和4年度
(2022年度)

自己点検・評価報告書

令和4年(2022年)4月1日から
令和5年(2023年)3月31日まで

令和5年(2023年)5月19日

学校法人吉田学園
専門学校北海道リハビリテーション大学校

■令和4年度(2022年度) 学校自己点検・評価について

〈説明〉

本校は、「知識・技術の習得はもとより、真摯な姿勢でリハビリテーションに取り組む人間性豊かな人財を育成すること」を教育理念とし、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士に求められる高度な医療知識やリハビリテーション技術の習得と多職種間連携を見据えたチームコミュニケーションの醸成など、これからの日本の医療・福祉に貢献できる人財の輩出に努めるべく、教育の質の向上を目指しています。「専修学校における学校評価ガイドライン」にもとづき、エビデンス(確認資料など)を集めて行なう自己点検・評価は、「教育の質」を保証するためのものであり、当該年度において、優れている点や改善を要する点などを自己点検し、現状を正確に把握・認識した上で自己評価することにより、更に教育の質を高め、一層の「学校運営の適正化」と「教育内容の充実」を図っていきます。

1. 対象期間

令和4年4月1日～令和5年3月31日

2. 委員会開催

令和5年5月18日(木)

3. 実施方法

(1)実施組織:自己点検・評価委員会

○委員長:校長 河原 範毅

○委員:副校長 柿崎 貴浩

理学療法学科 学科長 浜本 浩一

作業療法学科 学科長 目黒 文彦

言語聴覚学科 副学科長 北風 祐子

(2)評価基準:文部科学省「専修学校における学校評価ガイドライン」に準拠しています。

(3)評価方法:エビデンスをもとに、自己点検・評価委員会を開催し、学校自己点検・評価を取りまとめています。

4. 評価項目

(1)教育理念・目標

(2)学校運営

(3)教育活動

(4)学修成果

(5)学生支援

(6)教育環境

(7)学生の受け入れ募集

(8)財務

(9)法令等の遵守

(10)社会貢献・地域貢献

(11)国際交流

5. 評価項目に対する評価

(1)4段階で点数評価しました。

4:適切 3:ほぼ適切 2:やや不適切 1:不適切

(2)それぞれの評価項目のうち評価3以下のものについての状況と課題、対策について報告いたします。

1 学校の教育目標

<教育理念>

専門学校北海道リハビリテーション大学校は、知識や技術の習得はもとより、真摯な姿勢でリハビリテーションに取り組む、人間性豊かな人財を育成します。

<ディプロマ・ポリシー>

本校は、医療技術に関する知識及び技術を教授するとともに、豊かな教養と人格を備えた有能な医療技術者を養成し、よって社会に貢献しうる人財を育成することを目的とする。(学則 第1条 目的)

この目的を達成するため各学科共通のディプロマ・ポリシー(卒業認定、高度専門士授与の方針)を定める。

- (1) 本校の教育理念である、「Humanity and Science」に基づいた高邁な精神と高い倫理観、保健医療福祉の専門職としての豊かな教養と人格を身につけている。
- (2) 保健医療福祉の専門職に求められる基本的な知識・技術を体系的に理解・修得し、科学的思考ができる。
- (3) 様々な立場や意見を尊重しながら、自らの意見を伝達し、相互理解を得るコミュニケーション力を身につけている。
- (4) 自ら課題を見つけ、解決に向けて専門分野の知識・技術を活用し、主体的に取り組む探究心と自己研鑽力を身につけている。
- (5) 対象者のことを第一に考え、生活行為向上に向けて、真摯に取り組む姿勢を身につけている。
- (6) 保健医療福祉領域において自らの専門性を自覚し、多職種と連携・協働して、その責務を果たすことができる。
- (7) 保健医療福祉に関する地域社会及び社会全体のニーズを捉え、専門職として貢献できる。

2 本年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画

- (1) 予習・復習といった基本的学習習慣が身につくよう、入学前準備教育やリメディアル教育(基礎学力を補うための補習教育)を実施する。
- (2) 離脱抑止に向け担任教員と学科教員が一丸となって学生個々にきめ細かなサポートを実践する。
- (3) 国家試験は常に全員合格を掲げ、前年度を振り返り、学習方法の改善を図るべくグループワークを中心とするアクティブ・ラーニングの活用や ICT 教育の充実を図り、主体的な学びや学力の定着を促す。また、学生個々の学習状況や模試の結果等を把握し、習熟度に合わせ個別指導を徹底し全員合格に導く。

3 評価項目の達成及び取組状況

(1) 教育理念・目標

評価項目		適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(1)-1	学校の理念・目的・育成する人材像は定められているか (専門分野の特性が明確になっているか)	4
(1)-2	学校における職業教育の特色は何か	4
(1)-3	社会経済のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか	4
(1)-4	学校の理念・目的・育成する人材像・特色・将来構想などが学生・保護者等に周知されているか	4
(1)-5	学校の教育目標、育成する人材像は、学校に対応する業界のニーズに向けて方向づけられているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

(2) 学校運営

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(2)-1 目的等に沿った運営方針が策定されているか	4
(2)-2 運営方針に沿った事業計画が策定されているか	4
(2)-3 運営組織や意思決定機能は、規則等において明確化されているか、有効に機能しているか	4
(2)-4 人事、給与に関する規程等は整備されているか	4
(2)-5 教務・財務等の組織整備など意思決定システムは整備されているか	4
(2)-6 業界や地域社会等に対するコンプライアンス体制が整備されているか	4
(2)-7 教育活動等に関する情報公開が適切になされているか	4
(2)-8 情報システム化等による業務の効率化が図られているか	3

① 課題

- (2)-8 新しい校務システムが導入・運用されたが、機能や作業内容の周知・理解、諸帳票作成に係る業務の移行・準備などに遅れや問題が生じたため、まだ円滑かつ効率的な業務遂行には至っていない。
作業療法学科においては、臨床実習支援システムを導入・運用しているが、実習内容と結びついていないところが一部ある。

② 今後の改善方策

- (2)-8 校務システム、教務システム(LMS)は導入されたばかりであり、安定した運用までには一定の時間を要すると考えられる。その中で、一層の業務の効率化が実現できるよう、学校現場の実態や意見等を管理担当部署へ積極的に伝えるなどして、運用の適正化を進めていく。
作業療法学科の臨床実習支援システムについては、未対応部分の解消・改善がなされてきているものの、より業務の効率化に資するシステムとなるよう、引き続きシステム管理会社へのフィードバックや改善要求に取り組む。

③ 特記事項

(3) 教育活動

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(3)-1 教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針等が策定されているか	4
(3)-2 教育理念、育成する人材像や業界のニーズを踏まえた学科の修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか	4
(3)-3 学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか	4
(3)-4 キャリア教育・実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などが実施されているか	4
(3)-5 関連分野の企業・関係施設等や業界団体等との連携により、カリキュラムの作成・見直し等が行われているか	4
(3)-6 関連分野における実践的な職業教育(産学連携によるインターンシップ、実技・実習等)が体系的に位置づけられているか	4
(3)-7 授業評価の実施・評価体制はあるか	4
(3)-8 職業教育に対する外部関係者からの評価を取り入れているか	4
(3)-9 成績評価・単位認定、進級・卒業判定の基準は明確になっているか	4
(3)-10 資格取得等に関する指導体制、カリキュラムの中での体系的な位置づけはあるか	4
(3)-11 人材育成目標の達成に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか	4
(3)-12 関連分野における業界等との連携において優れた教員(本務・兼務含む)を確保するなどマネジメントが行われているか	4
(3)-13 関連分野における先端的な知識・技能等を修得するための研修や教員の指導力育成など資質向上のための取組が行われているか	4
(3)-14 職員の能力開発のための研修等が行われているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

(4) 学修成果

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(4)-1 就職率の向上が図られているか	4
(4)-2 資格取得率の向上が図られているか	3
(4)-3 退学率の低減が図られているか	3
(4)-4 卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	4
(4)-5 卒業後のキャリア形成への効果を把握し学校の教育活動の改善に活用されているか	4

① 課題

(4)-2 第 58 回理学療法士国家試験の結果は、受験者(現役生・既卒生)45 名中 43 名合格、合格率 95.6%(全国平均 87.4%)となった。不合格者(現役生 2 名)が出てしまった要因としては、遅刻・欠席を繰り返すなど基本的な生活習慣の確立や基礎学力の定着に課題がある学生に対し、学業や生活改善の指導が十分行き届かなかつたこと、国家試験の勉強に長期間取り組む中で気弱さや焦りを覚える学生に対し、精神面の強化を十分にサポートできなかったことが考えられる。

第 58 回作業療法士国家試験の結果は、現役生 17 名中 17 名合格で合格率 100%(全国平均 83.8%)、既卒生 3 名中 1 名合格で合格率 33.3%となった。既卒生不合格 2 名のうち 1 名は 10 年以上前の卒業生であり、受験の意志確認はもちろんのこと、国家試験に向けての学習支援が全くできなかった。もう 1 名は令和 3 年度の卒業生で、担当教員を配置し継続的に個別の学習支援を行ったが、基礎学力の低さ、絶対に合格するという強い意志や学習に対する積極性の不足から、合格には至らなかった。

第 25 回言語聴覚士国家試験の結果は現役生 10 名中 6 名合格で合格率 60%(全国平均 81.6%)、既卒生 6 名中 2 名合格で合格率 33.3%(全国平均 17.7%)となった。現役生については、全国平均をかなり下回る厳しい結果となった。不合格者のうち 3 名は入学時から基礎学力の低さが課題となっており、個別指導に力を入れてきていたが、取組開始時期の遅れと、本人の合格に対する強い意志の欠如が挙げられる。他の 1 名は模擬試験等では常に合格点に達しており、自己学習もしっかり行えていたが、試験本番で十分な実力を発揮できなかったことから、精神的なサポートがもっと必要であったと思われる。また、既卒生についても、低調な結果となった。受験勉強の開始時期をさらに早め計画的に取組を進めることや、国家試験に真剣に向き合うようモチベーションを高める指導・支援がより必要であると考えられる。

(4)-3 理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科の退学率はそれぞれ 8.7%、10%、10.5%であり、学校全体としては 9.3%となった。2021 年度と比較すると、理学療法学科は減少(10.9%→8.7%)、作業療法学科は増加(5.5%→10%)、言語聴覚学科は減少(10.6%→9.3%)となった。

主な退学理由としては、進路変更や学力不足による学業不振が挙げられ、入学者の学力差が大きく影響している。成績不振による単位不認定に伴う退学の割合が最も多く、一部ではあるが心身の不調により修学継続が困難となるケースも増加している。休退学抑止に向けては、入学前準備教育や入学後のリメディアル教育の実施など、基礎学力の定着を図るほか、アクティブ・ラーニングの積極的な実施や ICT 教育の導入など、専門領域の理

解・習熟と学習意欲の向上を図る教授方法の工夫・改善に取り組んだ。

② 今後の改善方策

(4)ー2 理学療法学科では、模擬試験における低得点者への個別指導を重点的に取り組むとともに、グループ学習を積極的に活用し、学生同士が互いに協力しながら学び合うピアティーチングに取り組むことで、難関試験へ果敢に挑戦する強い気持ちの醸成と、切磋琢磨しつつも個々の学生が自信を持てる環境づくりを進める。

作業療法学科では、4年生担任を中心として学科教員の総力を挙げた対応を続ける。こまめに模擬試験結果等を把握・分析しつつ、個別対応を行う。既卒生に対しては、受験や合格に向けた意思確認をしっかりと行った上で必要な学習支援を現役生同様に行っていききたい。

言語聴覚学科では、国家試験勉強に向けた動機づけを早期から行うこと、学科教員がチームとなり、担任だけではなく全員でのサポートを強化することが必要と思われる。また、1年次からの基礎科目の強化を行い、重要な学習内容を段階的に積み上げていきたい。学力不振の学生への個別対応に加え、その具体的な方法論については学科内で検討し、個々に合わせた学習方法を提供すること、特に既卒生については生活リズムを維持しながら学習に臨めるよう、学習環境を整え、きめ細かなフォローを実施していきたい。

(4)ー3 各学科とも、離脱者に関する分析を丁寧に行い、対策の検証・見直しを行う。

また、個別面談を通じて早期に学生の問題を把握し、関わり合いを増やす中でタイムリーな助言・支援を行うとともに、学生のモチベーション向上を図る授業づくりや教授法等、更なる工夫・改善を重ねて退学者抑止に努める。特に入学後の学習支援が重要であり、朝課題や補習の提供、形成的評価やアクティブ・ラーニングの実施、効果的なICT教育の活用を進める。

言語聴覚学科については3年制課程であるため、職業イメージと学修内容のギャップが大きいことも学習意欲の低下の一因となっているため、早期にキャリアイメージを身に付けさせることと、そのために何が必要かを考えるようなグループ学習を導入することで、モチベーションの維持・向上を図っていく。精神的な脆弱性を抱える学生も増加傾向にあるため、担任だけでなく学科全体としてサポートできる体制を築いていく。

③ 特記事項

(5) 学生支援

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(5)-1 進路・就職に関する支援体制は整備されているか	4
(5)-2 学生相談に関する体制は整備されているか	4
(5)-3 学生に対する経済的な支援体制は整備されているか	4
(5)-4 学生の健康管理を担う組織体制はあるか	4
(5)-5 課外活動に対する支援体制は整備されているか	4
(5)-6 学生の生活環境への支援は行われているか	4
(5)-7 保護者と適切に連携しているか	4
(5)-8 卒業生への支援体制はあるか	4
(5)-9 社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか	4
(5)-10 高校・高等専修学校等との連携によるキャリア教育・職業教育の取組が行われているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

(6) 教育環境

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(6)-1 施設・設備・図書は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか	4
(6)-2 学内外の実習施設、インターンシップ、海外研修等について十分な教育体制を整備しているか	4
(6)-3 防災に対する体制は整備されているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

(7) 学生の受入れ募集

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(7)-1 学生募集活動は、適正に行われているか	4
(7)-2 学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	4
(7)-3 納付金は妥当なものとなっているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

④ 特記事項

(8)財務

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(8)-1 中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	4
(8)-2 予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4
(8)-3 財務について会計監査が適正に行われている	4
(8)-4 財務情報公開の体制整備はできているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

⑤ 特記事項

(9)法令等の遵守

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(9)-1 法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	4
(9)-2 個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	4
(9)-3 自己点検・評価の実施と問題点の改善を行っているか	4
(9)-4 自己点検・評価結果を公開しているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

(10) 社会貢献・地域貢献

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(10)-1 学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	4
(10)-2 学生のボランティア活動を奨励、支援しているか	4
(10)-3 地域に対する公開講座・教育訓練(公共職業訓練等を含む)の受託等を積極的に実施しているか	4

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

(11) 国際交流

評価項目	適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切…1
(11)-1 留学生の受入れについて戦略を持って行っているか	-
(11)-2 留学生の受入れ、在籍管理等において適切な手続き等がとられているか	-
(11)-3 留学生の学修・生活指導等について学内に適切な体制が整備されているか	-
(11)-4 学習成果が国内外で評価される取組を行っているか	-

① 課題

② 今後の改善方策

③ 特記事項

総 括

年度当初に定めた、重点項目や計画、課題解決に向けた取組、学校関係者評価委員会の意見に対する取組などに関する総括。

1. 入学者の確保

2022年度(2023.4入学)、理学療法学科は2021年度に引き続き定員(60名)を充足することができた。高校生や保護者にも比較的理解されやすい職種であり、広報との連携・取組を通じて一層の職業理解を図るとともに、専門学校の特長や本校の魅力などを伝えることができたものと考えている。大学等との競合が厳しい中、AO入試に多くの出願があったのは、こうした背景があると考えているが、一方で入学者の学力差が開いている状況も顕在化している。今年度も定員確保を至上命題とし、必要な対策や施策に取り組んでいく。

作業療法学科の入学者は24名となり、2021年度の37名と比較すると大きく減少した。この一因には、作業療法士という職種の知名度の低さや職業理解の難しさがあると考えられる。一方、入学者確保に最大限努力する中で、入学者の学力差やモチベーション差が拡大するという学科特有の課題を抱える。また、心身に脆弱性を抱える入学者も増加傾向にある。より良い資質をもつ入学者を確保するためには、志望者の増加が何より求められるが、そのためには広報担当者との連携を密に行い、作業療法に対する理解を高め、作業療法士を志望する学生を一人でも増やす地道な取り組みを続けていく必要がある。加えて本校作業療法学科の魅力伝える上で、高校生に選ばれる学科として学科教員の教育力向上、学生と向き合う熱意や真摯さを備えた学科を目指していく。

言語聴覚学科の入学者は35名となり、2021年度の31名に続き30名以上を確保することができた。これは、オープンキャンパスなど情報発信に積極的に取り組むとともに、オープンキャンパスの実施内容を工夫することで競合校との差別化が図られた影響によるものと考えている。一方、大学を目指す層を引き込むことはできておらず、3年制のメリットをより強くアピールする必要があると思われる。言語聴覚士はまだ認知度が低く、全体的に国家試験の合格率も低い、それ以上にやりがいのある仕事であることを強調して伝えていきたい。オープンキャンパスや職業体験セミナーなどにおいても、言語聴覚士の魅力について理解してもらえるよう取り組むことで、志望者を増やすことにつなげていく。

2. 退学者等の抑止

学生の学力低下傾向が見られる中、退学者を抑止するためには、きめ細かな学習面のフォローや情意面における個別サポートなど、教員の丁寧な対応や保護者との連携が重要であると考えている。

退学者低減、離脱者抑止に向けては、更なる学校・学科の取組強化が必要であり、入学前準備教育や入学後のリメディアル教育など基礎学力定着に向けたフォロー、また、アクティブ・ラーニングの充実・ICT教育の活用を継続するとともに、好ましい人間関係の構築や学生の個性の伸長を図る指導体制の充実など、様々な対策を講じていきたい。さらに資格取得には入学から4年間(3年間)の修業年限が必要であり、その間のモチベーション維持は極めて重要な要素である。特に1年次はこれまでの学習環境と大きく変化し、モチベーションの低下が進路変更につながりやすく、目指す職種像を早い段階から形成する上で、職種の魅力・特長をわかりやすく伝える教育活動を充実させていきたい。

3. 資格取得率の維持・向上

理学療法学科は、現役生と既卒生全員合格(合格率100%)を目指して取り組んだが、既卒生は目標達成できたものの、現役生は全国平均を上回る結果に留まった。具体的な改善方策については前述のとおりだが、これまでの実績から取組効果が高いと判断できる、個別

の学習状況の把握、模擬試験結果を分析し弱い分野・領域についての重点的な指導、成績不振(低得点者)へのきめ細かな個別対応に力を入れていく。

作業療法学科も、現役生と既卒生の全員合格(合格率 100%)を目指して取り組み、現役生は目標達成できたものの、既卒生は合格率 33.3%に留まった。現役生に対しては、グループ学習を効果的に活用したアクティブ・ラーニングの実施、模擬試験結果を分析し個々の弱点把握と弱点克服に向けた個別対応に継続して取り組む。3月に行った卒業生と3年生の伝達会は、現役生の意識を切り替えるのに大変有効であったことから、今年度も実施する。既卒生に対しては、まず、本人の受験意思確認をしっかりと行うことが重要であり、その上で現役生同様の個別対応を行っていききたい。

言語聴覚学科は3年制課程であることから、国家試験対策に早期から取り組み、計画的に継続できる指導・支援を行っていく。例えば、ICTの活用を積極的・効果的に進めるほか、国家試験勉強に向けた雰囲気づくりを大切に、緩急つけた指導によりモチベーションの維持を図る。既卒生については、国家試験の結果の分析をしっかりと行い次の学習へとつなげるとともに、生活と学習のバランスを考えながら早期から真剣に取り組んでいくよう働きかけていく。

また、いずれの学科も既卒者の対応が必要となることから、学科全体による支援体制を整備しつつ、受験対策指導を進めていく。

今年度は、こうした取組を効果的に展開させ、3学科ともに国家試験合格率 100%を目指す。